

チャマダラセセリ *Pyrgus maculatus* (Bremer et Grey)

【選定理由】

愛知県の生息は関東から中部にわたる分布圏の西南端に当たる。いずれの産地も生息地はごく限定されている。かつては、道路脇や人家周辺の草地などにも生息しており、生息地の個体数はかならずしも少なくなく、成虫だけではなく、卵、幼虫なども同時に見出されることもまれではなかった。1980年代から、いずれの産地でも急速に姿を消した。愛知県では1990年代以降の記録がない。

【形態】

普通種のダイミョウセセリにやや類似するが、明らかに小型であり、翅表の白紋は顕著で、後翅表にも明瞭な白紋をもつことなどから、同定は容易である。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県では、1951年に北設楽郡下川村と本郷町（現在の東栄町下田、川角、本郷）から初めて記録され、その後、北設楽郡の稲武町（現豊田市）、設楽町、豊根村、および東加茂郡足助町、旭町、西加茂郡小原村（いずれも現豊田市）から少数の産地が報告された。

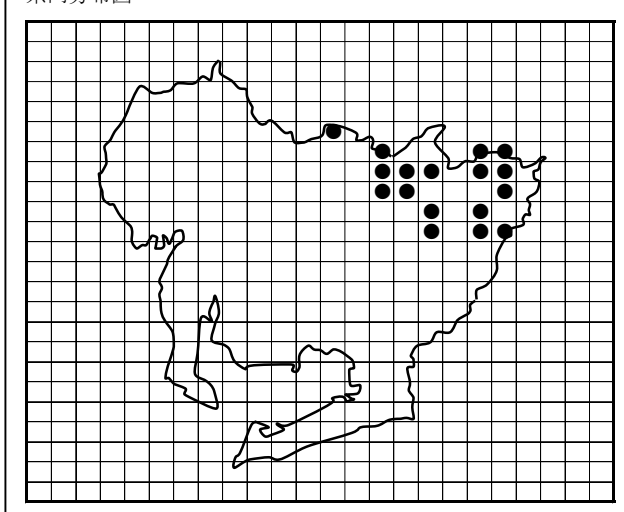
【国内の分布】

北海道東部、本州（東北・関東・中部）、四国に分布する。近畿・中国地方からは知られていない。本州中部では、長野県と山梨県を中心に生息し、その周辺に若干分布圏が拡大していたが、近年いずれの産地もほとんど絶滅ないし消滅に近い。

【世界の分布】

国外では、朝鮮半島、中国、モンゴルなど、東アジアに分布する。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

丘陵地の明るく広い草原に多くの産地があった。また、人家、道路、堤防、疎林などの周辺の小規模の草地にも生息していた。1950～60年ころの信州の春は、ミツバツチグリ、キジムシロ（バラ科）などの幼虫の食草が多く自生し、成虫もこれらの花で吸蜜するのがよく観察され、春の普通種とされていた。幼虫は、これらの食草の葉を折り曲げたり、重ねたりして巣を造り、蛹もこの巣から発見されるため、野外で幼虫や蛹を見出すことも困難ではなかった。

愛知県では、4月下旬から5月中旬、7月中旬から8月中旬に記録されている。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県では、豊田市（旧旭町）の1960年7月の記録、北設楽郡設楽町の1982年4月の記録が最後で、以来愛知県下からの記録が見出せないが、1986年ころまでの報告がある。恐らくこの頃に県下から姿を消したものと推察される。長野県でも、1980年以降は木曾郡と伊那地方を除いてほとんど見られなくなった。

減少の理由は明らかにされていない。各地とも食草の自生が減少したことが知られているが、食草が豊富に自生している地域でも本種は見られなくなっている。チャマダラセセリの産地には、ゴマシジミもともに生息しているところがあったが、これらもともにほぼ同じ頃から減少が確認されており、その共通原因の解明が望まれる。

【保全上の留意点】

道路の舗装などは必要最低限にし、草原や草地の保全や農薬散布の際の十分な配慮などに努める必要がある。

【特記事項】

岐阜県中津川市（旧恵那郡阿木村）や恵那市（旧恵那郡上矢作町）からも記録があり、前者では多産していた。

【関連文献】

高橋 昭・葛谷 健. 1956, 中部東海地方産蝶類目録第3報. 佳香蝶, 8 (29/30): 1-123.

(2009年版を一部修正)